

Cover

ルイ・ヴィトンとシャネルがこの春提案する靴とバッグはどちらもスポーティな佇まい。伝統的なクラフツマンシップとモダニティの融合に注目したい。バッグ(H32×W30×D15) ¥425,000(予定価格) / ルイ・ヴィトン クライアント サービス(ルイ・ヴィトン) 靴(ヒール3.5cm) ¥108,000(予定価格) / シャネル ボテイスーツ・スカート・グローブ / スタイリスト私物

photography:
Hiroko Matsubara
styling:Kayo Yoshida
hair:Kazuki Fujiwara(Perle)
make-up:Masayo Tsuda
(mod's hair)
model:Veronika R

※本誌に記載されている記号は、H(高さ)、W(幅)、D(奥行き・マチ)、単位はセンチメートルです。

Introduction

“ひとりダイバーシティ”時代の今 必要なのは靴なのか、バッグなのか——?

— Interview with 中野香織 —

『王室の秘密は女王陛下のハンドバッグにあり』という本に、イギリスのエリザベス女王とそのハンドバッグについての面白いエピソードが紹介されています。女王は、ハンドバッグを暗号メッセージのツールとして使っていたというんですね。昼食会や晩餐会の際に、テーブルの上にバッグを置いたら(そろそろお開きの時間)、床の上に置いたら(私の隣のゲストはものすごく退屈!) というように。マーガレット・サッチャーも会議のときは必ず黒いハンドバッグを持っていて、そこからメモを取り出し、読み上げていたというエピソードがあります。「サッチャーにとってのハンドバッグは、チャーチルにとっての葉巻である」と言われるくらい、相手を時に威圧させる政治のツールでした。バッグを持つことは男性にとっては野暮に見えるおそれがあります。ハンドバッグにいたっては女性しか持ちません。エリザベス女王やサッチャーは、男性政治家たちの騎士道精神の世界の中で、「高い女性」のアピールとしてハンドバッグを使っていたんじゃないでしょうか。それくらいバッグは女性を象徴するものです。

足もとのおしゃれはもともと男性のものでした。中世ヨーロッパでは男性もヒール靴を履いてましたし、脚線美を誇示するのも男性。ハイヒールが女性のフェミニニティやセクシーさを表すものとして欠かせなくなったのは戦後のマリリン・モンロー以降。地に足が着いていない、高いヒールの浮遊感から連想されるような非日常的な存在感が、女性らしさのひとつの典型になったとも取れます。ハイヒールは女性に不自由さをもたらすと同時に緊張感も生み出す。履くときは気持ち切り替わるんです。靴を脱ぐ“量文化”が根底にある日本では欧米ほど強く意識しないかもしれませんが、女性のマインドを決めるのは靴だと思えますね。

一方で現代女性にとって、地に足着けて動くことも大切。フラットシューズも大容量のバッグも必要です。けれどもいつも実用ばかりじゃスマートではない。場面にあった装い、靴とバッグの選択が重要になります。イットバッグやイットシューズという存在が定着したのは、ドラマ「SEX and the CITY」ブーム以降じゃないでしょうか。デザインの選択肢が増えた結果、靴とバッグは自分のスタイルと直結するものになりました。時に男性視線を意識したり、女性同士「最新のモードがわかっている私」を誇示するシグナルを送りあったり。場所やコミュニティによって“私”はいくつあってもいい、いわば“ひとりダイバーシティ”時代。固定的にいつも同じ個性であるより、場面にあわせてさまざまな自分を自然に演じ分けられる人のほうがカッコいい。今、靴もバッグも、なりたい自分を演出する切り替え装置としての役割を果たしているんだと思います。

Profile

なかの かおり ● エッセイスト・服飾史家。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。著書に「モードとエロスと資本」(集英社新書)、「紳士の名品50」(小学館)など。講演のほか、新聞や雑誌、ウェブの連載も多数手がける。

